

しごと放浪記

自分の仕事を
見つけたい人のために

森まゆみ

Mori Mayumi

まえがき 昼寝を楽しむ、フリーランスの一日

朝起きたら歯磨きとうがいをして、五分後に私は机のまえに座っています。

七時ごろ、メールチェックをして、デジタルで新聞を読みます。緑茶を飲みながら仕事にかかります。その間一〇分、通勤ラッシュに揉まれることはありません。目の病気をしているので、長いことパソコン作業はできません。ときどきスリープにして、資料を読んだり、洗濯をしたり、掃除もします。

お腹が空けばトーストを一枚、サラダとコーヒーぐらい。還暦を過ぎたので、仕事は少なめに、お昼過ぎにたいいてい終わります。

歩いて行ける範囲においしいランチのお店がいくつかあり、空くところを見計らい、気分転換に行くことも。そのついでに夕飯の買い物をし、銀行と郵便局に寄ることが多いです。郵便局が斜め前なのは助かる。買い物は、スーパーには行きません。町の小さな個店をこれ以上なくしたくないからです。気に入った魚屋が近くに二軒、肉屋二軒、八百屋もあります。総菜屋も、豆腐屋も、散歩ついでに寄ります。食材はフレッシュなのがいちばん、

買い置きはしません。まだまだ個店のある町に住めて幸せです。

仕事を立て混んでくると、それどころではありません。家の並びのお米屋さんがおにぎりを売っています。おいしいし、ありがたい値段です。自家製の味の濃くないおかずもあります。少し暇なら、坂をおりて保険がきく上手な整体に行きます。

それから小一時間、お昼寝。家で仕事をする最大の喜びは、ベッドで昼寝ができることです。三人の子どもは巣立ち、私一人にはこの家は少し広すぎます。ただたくさんの本も出したので、資料や本も多くて、一部屋は資料と自分の本の在庫でいっぱいです。

マンションの四階に住んでいます。地下にトランクルームがあり、そこにすでに刊行した本の資料は入っています。いただく本も多いですし、読み終わった本も多いのですが、もう二度は読めないという本は玄関の段ボールに入れ、家に来る若い人にあげています。あるいは友だちの古書店にさしあげます。

服も靴も少ないです。化粧品もほとんどないし、アクセサリーもほんの少し。指輪もネックレスもなんだか似合わないの。

天気によければ、午後、散歩に行きます。小石川植物園、六義園、東大構内、旧古河庭園、王子あたり、上野の博物館や美術館にも、歩いたり自転車で行きます。事故を起こさ

ないよう、細心の注意をして走ります。坂道は降りて押します。欲しいのだけど電動自転車をもたっていない。途中で地図を見て困っている外国人に会うと、道を教え、暇ならガイド。自分も外国で親切にされたり、案内してもらってうれしいこともある。いい印象を持って帰ってほしいから。

夜、近くの若い人もたまに飲みに来られます。エプロンをかけて、手早くつまみをつくりまわす。素材決定主義で、食材や調味料は選び、手をかけずに料理するのは得意です。二、三時間で疲れたら「もう電池切れ～」といって帰ってもらいます。お皿や鍋を洗ってくれる人、ゴミや空き瓶を下のゴミ置場まで持って行ってくれる人もいます。

たまに地域の仲間と外で一杯。といっても行きつけの町の店です。酒量は減ってきて、ビール中ジョッキ一杯とお酒一合くらい。仕事関係で飲むときも遠くまでは行きません。三田線の白山駅から近い神保町か日比谷、南北線の本駒込駅からなら飯田橋かせいぜい四ツ谷、その辺までです。都心と反対方向の、巣鴨、駒込、王子、赤羽、板橋も好きです。そのほうが都心方面へ向かうより開放感があり、居酒屋の値段も安いので。味よりも、居心地のいい、家の延長みたいなお店が好きです。

お風呂に入って、日付けの変わるまえには寢床に入ります。以前は徹夜もしましたが、

いまは今日のうちに床に就きたい。枕元の灯りで本を少し読みますが一〇ページも読むと眠くなります。読書のためにときどき、旅に出ます。そうすると、仕事を忘れて本に熱中できます。

クーラーはありますが、ほとんどつけません。窓を開ければ風通しがいいからです。頭寒足熱が好きなので、冬も暖房は足元に小さなホットカーペットくらい。幸い南と東向きなので日当たりがよくて助かります。目の病気をして眩しいのが辛いので、昼間は照明をつけません。私はこういう縮小生活を楽しんでいます。

一年の三分の一くらいは旅。国内はできるだけ電車を使います。思い立ったら足地向くままなので、宿は、当日スマホか電話で予約します。昔は旭川まで日帰りとかしましたが、いまではできるだけゆっくりした旅を心がけています。

こんな気ままな生活はいつからかしら。学校を出て二つの会社に勤めましたが、通勤ラッシュが嫌いで、会社をやめたいとずっと思っていました。忍耐力がなくて、上司のことを聞くのも、集団行動も不得意でした。要するに「勤められない人」なのです。結婚前に会社をやめて、子どもが次々生まれたころは貧乏でした。確定申告に行くと毎回、ど

うやってこの収入で食べているんですか、と同情されました。でも若いころは貧乏は気にならなかった。

フリーはたしかに安定していないし、給料もボーナスも退職金も、十分な年金も出ません。でも損得は考えたこともありません。私は最近、国民年金をもらい始めましたが、月に直すと六万ちよつとで、そこから介護保険料を引かれます。これではせいぜい食費ちよぽちよぽ。まあ、それでもいいか。嫌なことは嫌だ、心に染まぬことはしたくない、そう思うだけです。

生まれたからにはそのために生まれてきたという仕事を見つけない、と誰もが思っていると思います。そのために専門的な知識や資格もとりたいと思つて専門学校や大学に入るのでしよう。しかし、いまの大学のカリキュラムや教え方はそれに応えるようになっていると思えません。学歴をつけるためだけ、就職を先に延ばすためだけなら、大学に行く必要はないと思います。オン・ザ・ジョブ・トレーニングでもスキルや知識の習得は可能です。

会社が人を雇うことについても、経済の変動に対応すると称して非正規雇用が増えていきます。高度成長期を支えた終身雇用はとくに崩れています。さらに女性の場合、会社で

働き続けながら結婚をし、子どもを産んで育てたりできるのだろうか。保育園や学童保育に入り損ねないだろうか。

いくら男女平等といっても、家事や育児の負担は女性により大きくかかりがちです。いまいる場を改善するために戦うことは重要です。でも、いっそ人に使われるのでなく、フリーランスで生きていく道はないのか。そういう悩みや希望を誰しも抱えていると思います。

私は二四歳からは四〇年以上、フリーで、現在、作家、編集者、市民運動家、映像作家、古老の聞き書き、まちづくりのお手伝いなど、いろんな仕事をしています。大学や企業、政府、行政とも少しはかかわっています。何ごとも毛嫌いはしません。どこにおもしろい人がいるかわからないし、自分と考える違う人の話はおもしろい。一九八四年、二九歳のとき、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』というローカルメディアを起業し、子育てをしながら仕事の幅を広げてきました。

地域雑誌は十分な収入にはなりませんが、仲間や地域の人と助け合って、子どもを育てることができました。地域の壊されそうな建物を救ったり、この町をよくしたいという人々のネットワークをつくりました。もらいもの、応援も多く、給料以外の別の経済

も働いて、まるで「お布施で生きている」ような毎日でした。いまでは「谷根千」^{やねせん}の略称で親しまれ、たくさんのお見学者が来るようになりました。

暮らすためにお金の入る仕事もちろん大事です。でもなんだかんだ、やっていることの半分はお金とは関係ない。私は「人の、社会の役に立つこと」が仕事なのだと考えています。どうやったら自分の好きなことを仕事にできるのか。大学で何回か、お話をしたので、若い人々のお役に立てることはないか、と考えて、特に二〇代での悪あがきを中心に小さな個人的な経験を書き留めることにしました。

次の立ち読み箇所に続きます

第二章

PR会社に潜り込み、出版社に転職

年も改まった一九七七年、いとこの友だちのおじさんが社長を務める銀座のオズマPRという会社に、か細いコネを頼りに訪問しました。筆記試験はなく、作文を書いて持って来いというのです。テーマがなんだったかも覚えていません。日曜日に会社に作文を持って行くと、休日出勤の社員がいて、「あ、そこに置いて」といわれただけ。それは銀座でも一、二を争う古いビルではなかったか。とにかく私は採用され、卒業式のまえの三月一日から働きに行くことになりました。

銀座の土鳩のいるPR会社で

PRとは何かすら、知りませんでした。いまでもPRをプロパガンダの略だと思っている人や、広告宣伝と混同している人がいますがまちがいです。PRはパブリック・リレーションズの略。お互いの関係を開かれたよいものにするのが目的、そのころアメリカから入ってきたばかりの手法でした。業界で最大手は電通PRセンター。二番手のコスモ、共同などが、三〇人くらいの社員を抱えていました。私の社もそのくらいで、五つくらいのチームに分かれ、私と早稲田の歴史の大学院を出た同期採用のチェコは同じチームに配属されました。

広告は企業からのメッセージをデザインし、コピーライターと写真家、デザイナーが組んで、テレビや新聞、雑誌、ポスターなどの媒体に商品の宣伝を目的に作品をつくる。私たちが子どものころ、テレビでも「文明堂のカステラ」や「伊東のハトヤ」など連呼するテレビ広告がありました。もうあいうえお連呼は流行りません。もっと文化的な、もっと自由な広告を。アートとコマースを組み合わせた広告業界では、アートディレクターの石岡瑛子さんやコピーライターの糸井重里さんなどが活躍していました。

PRは商品そのものを宣伝するのではなく、人間関係をよくする仕事です。それにはさまざまな手法がありました。入社して私が配属されたのは明治乳業と日立の担当。会社と消費者、地域住民、行政、同業他社などとのよき関係（パブリック・リレーションズ）をどうやって築けるだろうか。

明治乳業ならば、チーズやヨーグルトを使ったレシピを開発し、ニュースリリースなどの形で媒体に送り、掲載してもらえるように働きかける。その際、その会社のヨーグルトの写真などが載ると、たいへんPR効果があります。あれを買ってつくれば失敗しないと思われるからです。チーズやバターの保存方法などをわかりやすく解説したチラシやミニパンフレットを制作して配ることも大事でしょう。

また、会社直営の路面店を開き、製品を売ったり、その製品を使ったヨーグルトやアイスクリームのお店を経営もしていました。その開店のイベントを企画したり、商品構成を考え、メニューをデザインするのは楽しかった。こういうことすべてをチームリーダーのHさんが懇切に教えてくれました。いま思うと彼も当時は二〇代の終わりだったのです。もう一人、以前この会社にいた凄腕のフリーランスの女性Yさんもいろんなことを教えてくれました。彼女は某大学全共闘のマドンナだったとの噂でした。

地域住民に対しては、工場見学会や、調理教室、地元住民サービスのディスプレイ・セールを行う。そうすると地域住民はその会社に好感をもってくれます。私が小学生のころ、野田のキッコーマン醬油の工場見学に行き、帰りにかわいい小さな醬油の瓶をお土産にもらいましたが、そんなことでキッコーマンに親近感をもちました。最近、信濃境で夏に一週間ほど合宿するたび、サントリーの白州蒸溜所に行つて、ウイスキー工場の見学をし、帰りに試飲させてもらうのですが、これも案内の人たちの感じがよくて、サントリーのファンになってしまひそうです。結局はボトルのウイスキーを買うことになるのですが。また企業はその創業者の思いや理想、苦勞など、その会社が何を社会に寄与してきたかはつきりと伝えることが大事です。渋沢栄一に始まり、松下幸之助、井深大、豊田佐吉、

本田宗一郎、そうした個性のはっきりして、好意をもたれている創業者のいる会社は強いです。

愛知県長久手市にはトヨタの創業以来の歴史を伝える博物館があり、ここも展示の質と係員の親切に感心します。同族会社がそのまま続いていく場合もあれば、別のたたき上げの社員が社長になることもあります。が、会社の思いがりや、緩み、油断、まちがった方向への商品開発、情報への疎さ、発信力のなさ、危機管理の拙劣は消費者に伝わって、とくに命取りになります。ことにSNSが発達してからは瞬時にこうした情報は伝わります。消費者に対しても、行政を含む社会全般に対しても、いかに会社が衛生、品質管理などに努めているか、いまでいうコンプライアンス（法令遵守）を果たしているか、環境問題に取り組んでいるか、いまだあれば女性が力を発揮できる企業になっているか、をアピールすることが必要です。

その企業で働く社員との関係も大切です。自分たちが社会的に認められている、社会に寄与する会社で働いている、満足できる待遇を社員として受けている、会社は社員を大事にしている、と社員が感じられるかどうか。しかし会社が不正義を働いている場合、消費者に情報を開示せず隠蔽している場合、社員が良心に従って内部告発するのは当然という

社会になってほしいものです。

メディアとの良好な関係を育てるためには、新製品の発表会、メディアの記者たちを招いての試食会などを催します。こうして、メディアにその会社の製品のリリースが掲載されると、記事の大きさを広告換算して、それを成果として企業に伝えました。消費者は広告よりも、記事をより信頼するのが常だからです。発想や企画が大切で、手法が多様なPRの仕事は、私にはピッタリでした。

一緒に入社した私たち二人は、社長の計らいで、当時、新しい考え方であったPRの講座に、会社の引けたあとに行かせてもらいました。研修費は社長が払ってくれた。シマ・クリエイティブハウスというところのアメリカ帰りの社長が講師を務め、PR先進国での実情を教えてくださいました。

HEIBという仕事

それによると、アメリカの大企業ではヒープ（HEIB＝ホーム・エコノミスト・イン・ビジネス）と名のつく女性が副社長（ヴァイス・プレジデント）くらいの重要なポストについて活躍している。当時、商品を実際に使うのは女性なのです。それまではアイロンも、牛乳

も、食器も、紙おむつも、ベッドも、掃除機も、みな男性が開発していた。しかし開発競争に熱中するあまり、高機能ではあるが使いにくい製品、余分な機能ばかりついている製品、女性のライフスタイルに合っていない製品がつくられれば、売れ行きが悪いのは当然です。

そこで、各社、実際に使う主婦（ハウスキーパー）の声を聞いて、使いやすい商品を出すように努力しました。当時はまだまだアメリカでも妻が主婦として家事を専業にしていました。最初、主婦をモニターにして意見を聞いているだけでしたが、そのうち女性で家政学などを専攻し、暮らしに精通した主婦をホームエコノミストとして採用し、社内商品テストを繰り返したり、商品開発にかかわらせるようになりました（いまなら男性も家事を分担しているので、彼らも生活用品についていろんな意見をもっているでしょう）。

一九七〇年代、日本はまだまだ性別役割分担の社会でした。私はアメリカとの違いに驚きました。しかし何事にも先駆者はいます。運もいいし、努力もした方たちです。そのころ、ヒープの業界の動きといえば、元『婦人公論』編集長の三枝佐枝子さんがトップを務めるセゾングループの「商品科学研究所」であり、高島屋常務を務める石原一子さんが行った社内改革が挙げられるでしょう。また、戦後『暮しの手帖』を創刊し、グラフィック

デザイナー、花森安治^{はなもりやすじ}の協力を得て、あらゆる家電製品の使い勝手や耐久性を調べ、その結果を雑誌で公表した大橋鎮子さんの活動などにも、まさにホームエコノミストの観点^{かんけん}が貫かれています。彼女たちが目立ったのは、いかにそういう女性が少なかったかの証ですが、何事にも突破口となる人は必要です。

二二歳でPR会社に入ったぺえの私も、何かおもしろいことをやりたかった。単なる商品の宣伝ではないことを。上司も日立製作所と明治乳業が組めば、何かやれるのではないかということになりました。たとえば、乳製品には牛乳でもチーズでもヨーグルトでも、冷蔵庫で冷やしてください、賞味期限はどのくらい、と書いてあります。一方、冷蔵庫メーカーのほうでも乳製品は冷蔵庫のこの段に入れるのがいい、と書いてあるのですが、それが乳製品メーカーの出している情報と食い違う。これでは消費者は迷ってしまいます。

そこで機電研（機械電気製品研究所）というところに行つて、冷蔵庫に乳製品を入れて、実際に実験してみました。また同時にたくさんの方の家の冷蔵庫内の様子を撮影し、いかに消費者が、乳製品メーカーや冷蔵庫メーカーの期待しないような問題のある冷やし方をしてるかということ調べました。正しい冷やし方、保存の仕方をアドバイスするパンフレットを両社の協力でつくりました。研究所で初めてエンジニアという男性に会い、ステキ

だなあと思いました。

勉強のチャンスはどこにでも転がっている

PRの仕事はおもしろく、いまでもやってみたいワクワクする仕事です。人間関係をよくするためには、さまざまな方法が取れ、飽きることがありません。

一方、実に地味な仕事もありました。それは会社の幹部に、その日の新聞から関連記事を切り抜いて届ける仕事でした。これはクリッピング・サービスといえます。キーワードで記事を切り抜いてくれる会社があったのです。

それを台紙に貼って、朝の九時ごろに京橋の明治乳業本社に持って行きます。コピー機を借りて幹部の数だけコピーし、ホッチキスで留めて配る。これは意外にたいへんな手仕事でした。コピー機のまえには社員の女性も並んでいるので、順番も待たなければなりません。

乳価、乳製品、生産者の動き、行政の動き、外国の動き、事故などの記事を幹部には読んでもらい、心得てもらうためです。それが何か問題が起きたときに機敏で的確な対応をもたらすのです。迅速な危機管理ができない会社は早晚つぶれます。のちに、雪印乳業の

製品で死亡事故が出た二〇〇〇年の事件など、製造過程における細菌の管理ができていないことが明らかになりましたが、それに加えメディアや消費者への対応の遅さ、お粗末さが社会的に批判を浴び、信用を失いました。

同様に、消費者運動や住民運動が、乳製品メーカーをどう見ているか、ということを取材してレポートすることも必要でした。そのため、休日には、日消連（日本消費者連盟）や母親大会などの論議を聞きに行きました。そのころ、消費者は食品添加物や農薬の害に関心をもち始め、無添加や無農薬の食品への要求は高まりつつありました。薬害や反公害運動も起きていました。

私は、その運動の中心にいた高橋皓正さん、高木仁三郎さんなどの講演を聞きに行き、「この人たちのいうことのほうが正しい」と思うようになりました。たとえば、人間は人のお乳を飲むべきであり、牛のお乳を飲む必要はないのではないか。牛乳は完全食品として、明治以来、福沢諭吉などが奨励し、給食にも取り入れられてきたが、過度な乳製品の摂取はかえってアレルギーを生み出すのではないか。そんな疑問が心にきざし、私はもつとこういう問題を論議できる会社に移りたいと考え始めました。

社内のファクション担当の女性は、いつもおしやれをして、媒体、クライアント、社内

の男性を率いて夜中まで遊び回っていました。いろんな世界があるのです。一方、私の直属の上司のHさんは環境問題に関心が高く、仕事一筋、立派な人でした。私とチエコはよく彼におごってもらいましたが、あるとき、チエコが「たいへんよ」というんです。「何?」「Hさんに月給おろしてきてと頼まれたらさ、手取り二〇万もないの」「そら、おごってもらうわけにいかないね」。彼は私たちを部下として可愛がつてくれましたが、女性としての扱いをされたことはありません。私はのちに結婚式の主賓に彼を招きました。

小さくてもおもしろい仕事の会社はある

とにかく、この会社で多くのことを学びました。

学生のときは、寄らば大樹の陰、有名な会社、大きな会社、給料のいい会社がよく見えるのですが、社会に出てみると小さな組織でもおもしろそうな仕事はいっぱいあります。たとえば、世界中の国が日本からの観光客を誘致するためにイタリア政府観光局とかスイス政府観光局といったオフィスをもっていることも知りました。この人たちの仕事もおもしろそうでした。

イタリアの魅力を雑誌のグラビアで取り上げてもらえるように働きかける。モニターツ

アーといって、オピニオンリーダーのような人たちに安くイタリア旅行をしてもらい、口コミで広める。イタリア旅行フェアや味覚フェアをデパートで企画する。そういうところで仕事をしている女性は言葉もでき、着ている服も垢抜け、ぼっと出の私には別世界の人のように見えました。

とにかく、会社勤めのスタートが銀座だったのはラッキーでした。八丁目にあるオフィスは古くて暗かったのですが、毎朝、京橋の明治乳業までタクシードで行くところと一方通行などで時間がかかるので、地下鉄に乗るか、歩いて行きました。その途中のショーウインドウで、ただだけ流行というものに敏感になったでしょう。

ランチには、銀座周辺でイタリア料理、ドイツ料理、ブルガリア料理、スペイン料理、なんでもお手頃に楽しむことができました。仕事帰り、夏はまだ明るいうちに、阪急百貨店の屋上のビアホールでジョッキを傾けたり。同僚のチェコと本や映画、歴史や哲学の話をしたあの時間の楽しさはいまでも思い出します。いや、隣にはビヤホールライオンも、ピルゼンという老舗のビアホールもありました。京橋にはブリヂストンの美術館（現アーティゾン美術館）もあります。会社の隣はシャンソン喫茶・銀巴里。

オーディションを受けていた「銀巴里」に、今度は観客として通いました。美輪明宏や

金子由香利の日は席が満席。歌手によってどうしてこうも違うのか。黒い飾り気のないロ
ングドレスに身を包んだ金子由香利の登場する夜、一曲一曲に違う女のドラマがステー
ジのスポットライトの下に映し出されるようでした。その銀巴里もいつしか消えてしまいま
した。

しごと放浪記 自分の仕事を見つけたい人のために
森まゆみ・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定 価：968 円 (10%税込)
発売日：2021 年 8 月 6 日
I S B N：978-4-7976-8081-2

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)